

社会正義をことばで伝える教育方法に関する研究 —ヒップホップを用いた授業実践の開発—

磯田 三津子（埼玉大学 教育学部 准教授）

1. 研究目的と方法

本研究の目的は、ヒップホップ・ラップを用いて、小・中学生の子どもたちが、身の回りにある社会問題を語り、それらの問題について考え表現できる教育プログラムを開発・実践し、その普及をめざすことである。以上の研究目的を遂行するために、次の三つの手続きに従って研究を進めた。第一は、社会正義をことばで伝える実践を先駆的に行ってきたアメリカの教育に関する文献を収集し、検討することである。第二は、アメリカのヒップホップの教育に関わる理論と実践に関する先行研究及び、ラッパーの晋平太からの助言を得ることを通して授業を構想することである。第三は、構想した授業を埼玉大学附属小学校5年生の総合的な学習の時間「おおりの時間」で実践することである。

2. 社会正義をことばで表現することとヒップホップ

1) ヒップホップの特質

ヒップホップは、1970年代にニューヨーク市のサウス・ブロンクスで誕生した。現在のヒップホップの一般的な構成要素は、グラフィティ・アート、ブレイクダンス、DJ、MCまたはラップ、ファッションの五つである。ヒップホップは、アフリカ系の貧困、人種問題などをめぐる経験を批判するために表現されてきた側面がある。それはアフリカ系アメリカ人をはじめとするマイノリティの声なき人たちの表現である。

2) ヒップホップを学ぶことの教育的な意義

アメリカではヒップホップが社会正義とどのように関わるのかについて次の二点から意味があるとされている。まず、ラップが子どもたちにとっての身近な文化であり誰にでもできる表現であるということである。ラップは、楽器などがなくても手拍子に合わせてリズムに乗って表現できる。どのような階層の人たちでも等しく表現できるのである。次に、ヒップホップは、社会について考えたことを人々に伝える表現形式であることから、自らの社会正義について表現し、社会に問う手段として適しているのである。

3) 日本型のヒップホップの実践について—小学校と大学での取り組み

本研究については、『ヒップホップ・ラップの授業づくり — 「わたし」と「社会」を表現し伝えるために』（磯田三津子著、晋平太協力、明石書店、2021年）にまとめ出版した。本書では、1. 「ラップについての基礎知識」、2. 「ヒップホップ・ラップによる6つの授業」、3. 「ヒップホップを学校で学ぶことの意味」について論じた。そこで構想した授業の一部は、埼玉大学教育学部磯田ゼミ及の学生の授業「教育臨床演習」及び、埼玉大学附属小学校5年生「おおりの時間」で実践した。いずれもラップの基礎となる授業をラッパーの晋平太が指導した。そこで大学生は、自己紹介をするラップをつくった。例えば、次のようなラップである。「俺の名前は坂本翔太（仮名） 関東に憧れ上京した レペゼンは山形の天童 田舎の中では都会の方 趣味はスポーツ観戦、特技は将棋 海外サッカー大好きだ 夢は誰かの目標になる 影響を与える必要がある」

埼玉大学附属小学校では、コロナの感染防止のため中断することも多かったがおよそ半年に亘ってヒップホップの学習を総合的な学習の時間（おおりの時間）で行うことができた。最初は自己紹介のラップから始まり、最終的には「みんなを元気にするヒップホップ」をつくった。その背景には、コロナ禍で人々の気持ちが落ち込んでいる状況を変えて、希望のある未来をつかっていきたいという子どもたちの思いがある。各クラスそれぞれダンス、グラフィティ、ラップの担当者を決め、みんなを元気にするというテーマに基づいてヒップホップをつくった。その成果は、録画され、ビデオを作成することになった。ビデオは保護者や地域にも配布して、子どもたちの思いを伝えることが期待される。

研究としての今後の課題は、よりいろいろな子どもたちにラップを通じて批判的思考や創造力といった学力を育成することである。ヒップホップの学習は、アメリカでは貧困層のアフリカ系、ヒスパニックといった子どもたちに意味があると言われている。日本においても、貧困、外国につながるの子どもなど多様な子どもたちがいる。そういった子どもたちこそ、ヒップホップで学び学力を高めてほしい。そのために、現在も、晋平太と共に、NPOの団体とそこに通う子どもたちと一緒に、ヒップホップによる学習を展開しているところである。